所報ふくしま
窓
福島県教育センター
2011.3
No.160
「窓」に寄せる思い
～教育に寄せる心を開く小さな「窓」～
小さな「窓」から広がる教育の世界が見えてきます。

「学び続けることと学び直すこと」

研究・研修部長　太田　孝

教職に携わる者が不断に学び続けていく必要があることは、教育公務員特例法第２１条を引き合いに出すまでもなく、当然に必要なことです。特に、現代のように日本の社会が急激に変化していく中では、児童・生徒、家庭、地域からの期待に応えた教育を行うために、教員にとって学び続けていくことは不可欠のことになっています。

自分自身として満足のいく授業を行っているかどうか、自分の行っている教育活動が児童・生徒、家庭、地域の期待に応えた教育となっているかどうか、これらは教員としての誇りと喜びの源であり、かつ、大きな苦労の種でもあります。

一方で、自分一人だけで学び続けることには大きな落とし穴もあります。一時期、日本の携帯電話は、日本の市場において独自の進化を遂げるあまり、技術的には世界の最先端を行きながらも、世界標準から掛け離れてしまったとの論議が盛んにされていました。人間は誰しも、自分の興味のあること、自分の得意なことには熱心に取り組みますが、それ以外のこと、特に苦手なことや不得意なことは後回しになったりします。また、逆に、自分では得意だと思っていることのために、ひとりぼっちのお山の大将になってしまうことだってありえます。油断をしていると、自分では最高の教育を行っているつもりでも、時代や児童・生徒、家庭、地域の期待からかけ離れた自己満足だけの教育となってしまっているかもしれません。

このようなことが起こらないようにするためには、他者の目を通しての見直しが重要です。採用後１１年目の経験者研修Ⅱは、この点で大きな機会となっています。また、この経験者研修Ⅱは悉皆研修としては最後のものとなっていますが、これ以降の研修としては、職能研修と専門研修が大きな位置を占めます。専門研修については、平成２３年度は講座数を大幅に増加させ、計４１講座を実施します。内容面でも新設１４講座、改編８講座としました。また、職能研修についても内容のリニューアルを図りました。

一人で学び続けることも大切ですが、それだけでなく、仲間とともに学び、その機会を通して、児童・生徒、家庭、地域の期待に応じることができるように、時代の要請に応じて学び直すことが今まで以上に重要になっています。

平成２３年３月１１日午後２時４６分、日本は、そして福島県は未曾有の大震災に見舞われました。現在、平成２３年度の研修の実施については、全く不透明な中、当教育センターでは様々な準備に取り組んでいます。この大災害の復興には、何年、何十年とかかることを、我々が皆覚悟をする必要があります。場合によっては、私たちの世代だけでなく、次の世代に引き継がなければいかないかもしれません。このような時代だからこと、我々も「学び」に希望の灯を託し、次世代にその希望の灯を引き継いでいきたいと思っています。

○既刊誌、並びに同誌のより詳しい情報を**所報ふくしま「窓」Ｗｅｂ版**に掲載しておりますので、ぜひご覧ください。
○同誌に関するご意見・ご感想、並びに研修に関するご質問等がございましたら、下記連絡先までお寄せください。

編集発行　：　福島県教育センター　〒９６０－０１０１　福島市瀬上町字五月田１６番地
TEL　０２４－５５３－３１４１（代表）　FAX　０２４－５５４－１５８８
URL　http://www.center.fks.ed.jp/mado/　E-mail center-kikaku@center.fks.ed.jp

教員研修チームからの発信

思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくり

新しい学習指導要領が公示され、「生きる力」をはぐくむという理念は変わらないことが確認されました。平成20年に文部科学省から出された「生きる力」のパンフレットでは、「生きる力」が必要とされる背景として、以下の２点が提言されています。

◎　現代の知識基盤社会において「課題を見いだし解決する力」が求められる。

◎　「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題」に課題がある。

また、福島県教育委員会が作成した平成22年度全国学力・学習状況等調査の福島県の結果概要には、「知識・技能のより確実な定着と、これらを活用して課題を解決する力の育成が必要と見られる」ことから、以下の３点が、授業改善のポイントとして示されています。

○　児童生徒の学力や学習状況を多面的に分析し、学習指導の成果や課題を明らかにして、授業改善を図る必要がある。

○　学年や教科にとらわれず、組織的、継続的に学習指導等の改善に取り組んでいく必要がある。

○　児童生徒の学力向上のために指導体制や指導方法を一層工夫する必要がある。

これらのことから、現在の子どもたちには「確かな学力の定着と向上」、教師には「指導力の向上と授業改善」が求められている。

ここでは、算数・数学科における思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくりを紹介します。

【思考力・判断力・表現力をはぐくむ授業づくり（算数・数学科）】

○　算数的・数学的活動を一層充実させ、問題解決的な学習を展開することで、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付け、数学的な思考力・表現力等を育て、学ぶ意欲を高める。

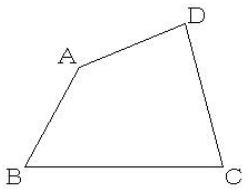
＜平成23年度「学校教育指導の重点」（福島県教育委員会）＞

今回、改訂された小学校の教科書には、授業改善のための工夫が随所に提案されており、そのことを意図して、問題解決型の授業の一例が示されています。

＜小学校第５学年下「図形の角p5～」＞（東京書籍）

四角形の４つの角の大きさの和は，何度になりますか。

角度をはからないで求めましょう。



ねらい：　三角形の３つの角の大きさの和（180°）をもとにして、四角形の４つの角の大きさの和が360°になることを演繹的に考え説明できる。

①　まず自分で考えてみよう。

・今まで学習したことで使えることはないかな。

〈三角形の３つの角の大きさの和は180°〉

②　自分の考えをかき表そう。

・ほかの人が見てもわかるようにかこう。

・一つできたら，別の求め方を考えてみよう。

③　友だちの考えを知ろう。

・友だちの考えていることがわかるかな。

・自分の考えと同じところやちがうところはどこかな。

④　みんなで話し合ってみよう。

・友だちの考えのいいところを見つけよう。

⑤　まとめよう。

・今日の学習でどんなことがわかったかな。

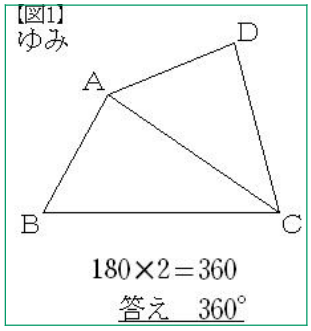
⑥　確かめよう。

・学習したことを使って別の問題に取り組んでみよう。

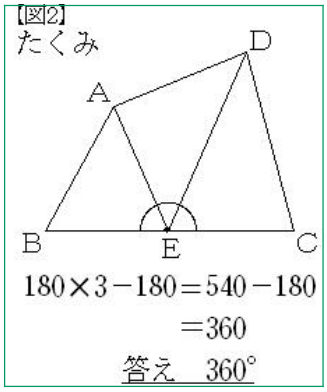
①から⑥の流れで教科書紙面どおりに授業を展開すると、子どもたちは自分で考えて、自分で持っている力を使うことやそれを発表することが経験できます。友だちと比較検討することもできるので、自分の持っている既習の内容を使うことを実感する授業が実現できます。

＜伝え合う学習活動＞

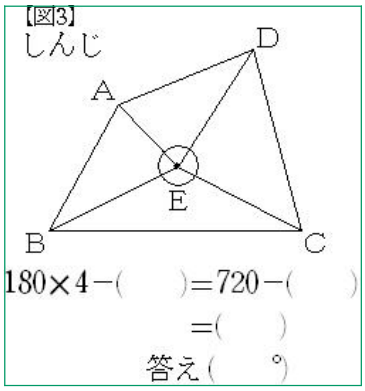
新しい教科書では、**友だちの図や式を読むことを意図的に示唆する場面**が出ています。普通は、かいた本人が説明しますが、かいた本人は出てきません。ゆみさんやたくみさん、しんじさんがかいた図や式を、他の人（ひろきさんやかおりさんみほさん）が「こういう意味ではないか」と読むことを、意図的に取り上げています。つまり、**図や式を読むことを通して思考力・表現力を付けよう**と考えています。



ひろき



かおり



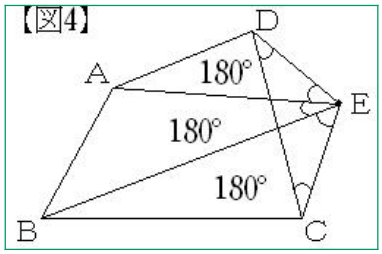
みほ

【図１】のように対角線で分割すると、既習事項(三角形の３つの角の大きさの和は180°）を使って四角形の４つの角の大きさの和が求められます。

【図２】のように辺上に点Ｅを置くと、三角形が３つになります。「180×3=540°」と間違った児童は「どうして180°を引いたのかな？」と考えるでしょう。学習過程で、**間違っている理由を問いかける**ことによって、既習事項を用いながら**間違いの根拠を判断し、他者に論理的に説明する学習**ができます。「半円部分に一直線＝180°が余計に加えられている」ことが確認できます。

【図２】の考えをもとにすると、【図３】のように図形の内部に点Ｅを置いた場合は、「点Ｅの周りにできた円＝360°が余計に加えられている」ことがわかります。

四角形の４つ角の大きさの和は、三角形に分けて考え、求めることができることに気付かせます。



【図４】のように図形の外部に点Ｅを置き、**発展的な場面の解釈に挑戦**させることも可能です。

このように、問題解決型の授業では、まず、各自が問題について十分に考え、次にそれをもとによりよい考えを求めて友だちの考えと比較検討するので、思考力だけでなく、他者の表現を解釈し理解する力や、自分の考えを簡潔・明瞭に表現する力が養われます。

授業改善の１つの方法を教科書で提案していますので、ぜひ参考にしてください。

観点別学習状況の評価が変わります！

新しい学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等を育成するため、基礎的・基本的な知識・技能を活用する学習活動を重視するとともに、論理や思考等の基盤である言語の果たす役割を踏まえ、言語活動を充実することとなっています。これらの能力を適切に評価し、育成していくため、各教科の内容等に即して思考・判断したことを、その内容を表現する活動と一体的に評価する観点「思考・判断・表現」を設定することが適当であるとの判断から、評価の観点が変わりました。

また、文部科学省が平成22年５月に作成した「児童生徒の学習評価の在り方（報告)」には、学力の重要な要素を踏まえた新しい学習指導要領等の趣旨を反映するために、新しい評価の観点が示されました。

学力の重要な３つの要素		新しい評価の観点
①基礎的・基本的な知識・技能の習得	➡	**「知識・理解」「技能」**
②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等	➡	**「思考・判断・表現」**
③学習意欲	➡	**「関心・意欲・態度」**

もともと学習評価には、「児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有する」という意義があり、そのために学習指導と学習評価の一体化が求められています。現在の子どもたちに求められている「確かな学力の定着と向上」には、教師によるきめの細かい学習指導の充実が必要であり、児童生徒一人一人の実現状況を教師が的確に把握し、その後の学習や発達・成長が促されるように評価し、自らの授業を見つめ直すことが大切になってきます。

教育センターでは、 初任者研修、経験者研修Ⅰ、経験者研修Ⅱおよび専門研修において、思考力・判断力・表現力をはぐくむ指導の在り方や問題解決的な学習の在り方など、「確かな学力の定着・向上」を図る授業づくりを研修者とともに進めていきます。

教育相談チームからの発信

研修内容の改善・充実のための調査研究

～研修者のメンタルヘルスの現状把握分析を通して～

１　はじめに

教育相談チームでは、平成19年度から経験者研修等基本研修受講者を対象に「教師自身のメンタルヘルス」というタイトルで、研修者の負担感、疲労感の軽減及び意欲の向上を図ることを目的とした講義を行っています。今回は、この講義内容の精選・充実を目的に研修者のメンタルヘルスに関する調査を行い、研修者の実態を把握するとともに、各学校においても日常生活や校内研修等で取り組めること、留意すべきことについて提案したいと考えました。

２　調査の対象と方法

(1) 調査対象

幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校教員で当教育センターにおける基本研修15講座を受講する研修者及び教育相談系専門研修受講者690名。

集計の関係上、教職経験年数ごとに呼称を設定しました。

・教職経験年数０～４年　：初任研世代
・教職経験年数５～９年　：経験Ⅰ世代
・教職経験年数10～14年　：経験Ⅱ世代
・教職経験年数15年～　　：経験Ⅲ世代

単位：人

		小学校	中学校	高等学校
全体	男性	65(30.1%)	76(52.4%)	203(65.1%)
	女性	151(69.9%)	69(47.6%)	109(34.9%)
全　体		216 (100%)	145 (100%)	312 (100%)
初任研世代		67(31.0%)	37(25.5%)	94(30.1%)
経験Ⅰ世代		66(30.6%)	53(36.6%)	57(18.3%)
経験Ⅱ世代		46(21.3%)	36(24.8%)	78(25.0%)
経験Ⅲ世代		37(17.1%)	19(13.7%)	83(28.5%)

図１　調査対象

(2) 調査方法

①　時期

平成22年度６月～２月にかけての講座期間中

②　調査方法

質問紙法

回答については、４件法・自由選択・自由記述

③　調査内容

個人の属性、ストレス状況、充実感・やりがい、ストレス対処状況

３　調査結果（回収率99.6%）

(1) ストレス状況

①　ストレス反応

全研修者の約60%が、心身の調子が「とても気になる」「少し気になる」と回答していました。

全校種・全世代で「疲れやすい」「首筋肩がこる」等の身体的反応を選択する研修者の割合が高く、その中でも、全校種の初任研世代は、「自分の能力に自信が持てない」を一番多く選択していました（**図２**）。また、ストレスの程度が高いほど、心身の調子についても気にする等、ストレスと心身の調子については、中程度から強い相関が見らました。

自分の性格・行動特性については、校種や世代にあまり影響されず、「他人から頼まれると嫌といえないほうだ」「他人の言うことや顔色が気になるほうだ」が選択されています（**図３**）。

世　代	順	小学校	中学校	高等学校
初任研世代	1	能力に自信ない (31.3%)	能力に自信ない (37.8%)	能力に自信ない (24.5%)
	2	首・肩がこる (31.3%)	疲れやすい (37.8%)	首・肩がこる (24.5%)
経験Ⅰ世代	1	疲れやすい (48.5%)	疲れやすい (49.1%)	首・肩がこる (35.1%)
	2	首・肩がこる (39.4%)	首・肩がこる (32.1%)	疲れやすい (33.3%)
経験Ⅱ世代	1	首・肩がこる (47.8%)	疲れやすい (41.7%)	疲れやすい (30.8%)
	2	疲れやすい (37.0%)	首・肩がこる (41.7%)	首・肩がこる (24.4%)
経験Ⅲ世代	1	疲れやすい (35.1%)	疲れやすい (26.3%)	首・肩がこる (32.5%)
	2	首・肩がこる (32.4%)	首・肩がこる (26.3%)	疲れやすい (27.7%)

図２　心身の調子で気になること

	職	小学校	中学校	高等学校
初任研世代	1	頼まれると嫌といえない (67.2%)	頼まれると嫌といえない (73.0%)	頼まれると嫌といえない (66.0%)
	2	子どもの世話が好き (65.7%)	頑張り屋 (62.2%)	涙もろい (53.2%)
経験Ⅰ世代	1	頼まれると嫌といえない (69.7%)	頼まれると嫌といえない (84.9%)	頼まれると嫌といえない (75.4%)
	2	他人の顔色をうかがう (63.6%)	頑張り屋 (47.2%)	子どもの世話が好き (50.9%)
経験Ⅱ世代	1	頼まれると嫌といえない (82.6%)	頼まれると嫌といえない (66.7%)	頼まれると嫌といえない (65.4%)
	2	他人の顔色をうかがう (65.2%)	涙もろい (52.8%)	頑張り屋 (52.6%)
経験Ⅲ世代	1	頼まれると嫌といえない (78.4%)	頼まれると嫌といえない (63.2%)	頼まれると嫌といえない (72.3%)
	2	他人の顔色をうかがう (56.8%)	他人の顔色をうかがう 頑張り屋 (57.9%)	能率的に仕事を 片付ける (44.6%)

図３　自分の性格・行動特性（校種・世代別）

②　ストレスとストレッサー

職場でのストレスを「とても感じる」と回答したのは、中学校経験Ⅱ世代（27.8%）の研修者でした。次いで、中学校経験Ⅰ世代（25.0%）、中学校初任研世代（22.2%）と中学校の研修者のストレスの高さが目立ちました（**図４**）。

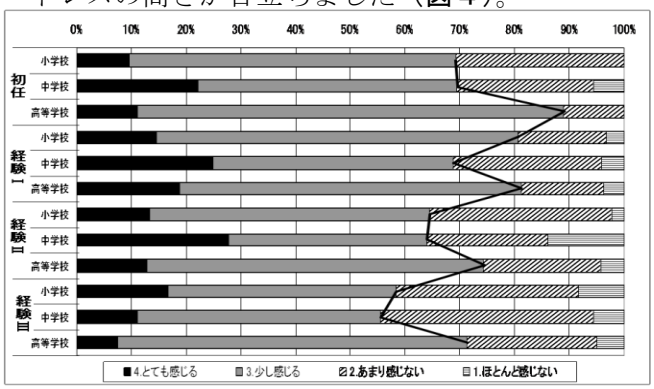


図４　職場でストレスを感じる程度

ストレッサー14項目において、ストレスを「とても感じる」と回答した割合が高い選択肢は、全校種・全世代で、「教材研究をする時間がない」でした。その他、中学校女性・高等学校男性では、「生徒指導」に対して、担任は「保護者への対応」に対して、主任は「校務分掌」に対して、よりストレスを感じると回答していました。

また、ストレスを感じる程度が高い群の研修者ほど、人間関係のストレスを抱えやすい傾向も見られました。

(2) 充実感・やりがい

全研修者の約90%は、教員の仕事に充実感・やりがいを「とても感じる」と回答していました。特に、小・中学校では、担任をしている研修者ほど、充実感・やりがいを感じると回答していました。

具体的に14項目をあげて、どのような項目が充実感・やりがいにつながるのかを尋ねてみると、全校種・全世代で「授業がうまくいくこと」に、充実感・やりがいを感じていることがわかりました（**図５**）。

世　代	順	小学校	中学校	高等学校
初任研世代	1	授業がうまくいく (3.9)	授業がうまくいく (3.8)	授業がうまくいく (3.8)
	2	和やかな職場 (3.9)	児童生徒から頼りにされる (3.8)	児童生徒から頼りにされる (3.6)
経験Ⅰ世代	1	授業がうまくいく (3.8)	授業がうまくいく (3.8)	授業がうまくいく (3.7)
	2	学級のまとまり (3.8)	学級のまとまり (3.6)	和やかな職場 (3.5)
経験Ⅱ世代	1	授業がうまくいく (3.9)	授業がうまくいく (3.8)	授業がうまくいく (3.7)
	2	児童生徒への対応がうまくいく 学級のまとまり (3.8)	児童生徒への対応がうまくいく (3.7)	支え合う職場 (3.5)
経験Ⅲ世代	1	授業がうまくいく (3.9)	授業がうまくいく (3.9)	授業がうまくいく (3.8)
	2	児童生徒から頼りにされる (3.8)	児童生徒への対応がうまくいく (3.9)	児童生徒から頼りにされる･和やかな職場 (3.6)

図５　充実感・やりがいにつながることとその程度

また、ストレスを感じる程度が高い群の研修者ほど、「職場の雰囲気のよさ」や、「自分のよさを認めてもらえる」ことで、充実感ややりがいを感じていると回答していました。ストレスと充実感・やりがいの関係については、はっきりとした相関は認められませんでしたが、充実感ややりがいの高さは、ストレスの緩和にもつながっていることが推察されました。

(3) ストレスと性格傾向

全研修者に共通しているのは、「他人から頼まれると嫌といえないほうだ」という項目でした。さらに、ストレスが高い群の研修者ほど、「人の顔色や言うことが気になる」を選択しています。逆に、ストレスが低い群の研修者ほど、「何事も事実に基づいて判断するほうだ」「情緒的というよりむしろ理論的なほうだ」「能率的に仕事を片付けているほうだ」を選択していました（**図６**）。また、「人に相談できる」「人の相談にのる」研修者ほど、「相談するのが苦手」「人の相談を受けるのが苦手」という研修者よりストレスを感じる程度が低く、充実感・やりがいを高く感じる傾向が見られました。

	小学校				中学校				高等学校			
ストレス程度 / 設問	4群 n27	3群 n116	2群 n56	1群 n6	4群 n32	3群 n59	2群 n37	1群 n10	4群 n40	3群 n181	2群 n64	1群 n15
他人から頼まれると嫌と言えない	77.8	73.3	67.9	66.7	71.9	79.7	62.1	60.0	65.0	67.4	70.3	73.3
他人の顔色や言うことが気になる	81.5	65.5	53.6	33.3	59.4	54.2	43.2	30.0	42.5	47.5	32.8	46.7
何事も事実に基づいて判断するほうだ	18.5	19.8	19.6	33.3	31.3	15.3	22.5	46.7	20.0	19.3	21.9	26.7
情緒的というより理論的なほうだ	7.4	15.1	16.1	33.3	31.3	20.3	18.9	50.0	20.0	13.8	20.3	46.7
能率的に仕事を片付けていくほうだ	7.4	20.7	25.0	0	28.1	18.6	24.3	50.0	45.0	29.3	40.6	46.7

図６　ストレスと性格・行動特性（設問別）

４　調査から明らかになったこと

(1) 心身の健康状態の悪化は、ストレスと関連しており、ストレスを感じる程度が高い研修者ほど心身の調子が気になっているようです。

(2) ストレスを感じる程度が高い研修者ほど、人間関係に関するストレッサーを選択する割合が増えてきます。

(3) ストレスを感じる程度が高い研修者ほど、自分を認めて欲しいと思う傾向があるようです。

(4) 個人の性格・行動特性は、学校種別や教職経験年数等により特徴が見られます。

(5) 性格・行動特性の選択率やエゴグラムから見ると、研修者には、ストレスを受けやすい傾向が見られました。

(6) 職場の雰囲気を良好にしていくことや同僚と相談し合える関係づくりを行う等、同僚性・協働性を高めることが充実感ややりがいを高める上で大切なようです。

(7) 校種、性別、教職経験年数、担任の有無、主任の有無、学校規模等教員としての様々な属性により、ストレスの程度やストレッサーの種類が違ってくることを理解することも大切なようです。

５　研修内容の改善充実に向けて

(1) 講義「教師自身のメンタルヘルス」の見直し

今回の調査結果を活かした講義資料を作成し、活用することで、研修者の共感がより得られるようになりました。今後に、十分活かしていきたいと考えています。

(2) 各学校等の校内研修で取り組める内容について

① 承認感を高め合うこと

互いの承認感を高め合うために、よい結果を称賛する（結果承認）だけでなく、日常の挨拶を大切にする（存在承認）、今現在行っていることについて認め合う（事実承認）ことも、今以上に、学校の職員が意識して行っていくことが大切です。

② 協働性・同僚性を高め合うこと

教職員の援助性・被援助性を高め、互いに支え合う雰囲気を職場内に醸成するために、次のようなことを取り組むことも大切と思われます。例えば「傾聴・非傾聴の体験」「構成的グループエンカウンターやプロジェクトアドベンチャーの体験」「事例研究」等です。また、自分の性格・行動特性を理解することも、よりよい関係づくりに大切です。

③ 管理職による配慮について

管理職の方に特に配慮していただきたいことは、「指示がきちんと伝わっているのかを確認する」「業務が滞っている職員への具体的な支援を行う」「教材研究する時間の確保について手立てを講じる」「職員の属性要因にも配慮した校内体制づくりを行う」「承認感の高め合いに配慮する」等です。

６　おわりに

教員のメンタルヘルスの現状把握のためのアンケートを作成し、その調査結果から、研修者のストレス傾向・充実感・やりがいをある程度明らかにすることができました。また、講義資料の充実が図られ、各学校でのメンタルヘルスの維持・向上に取り組む上での参考となる方策を提示することができました。

今後は、各学校において、先生方のメンタルヘルスの維持向上に取り組む際に参考となるような具体的な内容や手法等について試案を作成して試行、実践していけるようにしていきたいと考えております。

調査研究チームからの発信

いよいよ本格実施！

「言語活動の充実」の日常化ための 4 elements ＋ 8 points

～４つの授業要素と８つの授業改善の視点～

小学校を皮切りに，いよいよこの４月から新学習指導要領が全面実施となります（中学校は来年度）。今回の改訂の一丁目一番地は何かと問われれば，ご存じのとおり「言語活動の充実」がそれに当たります。福島県教育センターでは，「言語活動の充実」を図るための学習指導の在り方について２年間研究を進めてきましたが，今回は，研究を通して見えてきた「言語活動の充実」の日常化を図る上で大切な４つの授業要素と８つの授業改善の視点についてご紹介します。日々の授業で「言語活動の充実」を図る際の参考にしてください。

○ 「言語活動の充実」とは…

言語活動とは，文字通り「言語を駆使した活動」のこと。「話す」「聞く」「書く」「読む」という子どもたちがこれまでも行ってきた行為です。しかし，今問われているのは，言語活動の「充実」。言語活動を行う目的を鑑み，児童生徒一人一人が思考力・判断力・表現力等を働かせた状態を，言語活動が「充実」している様相ととらえたいと思います。

1st element 言語活動が位置付けられた指導計画・単元計画

教科によって授業展開・単元展開は違いますが，児童生徒一人一人が考え，表現する時間と機会を保障することが，すべての大前提です。

●Point 1● 各段階で，しっかりと「言語活動」を位置付けましょう！

一人一人の思考力・判断力・表現力等が働く言語活動を，しっかりと位置付けましょう。考える力は考えることで，表現する力は表現することではぐくまれます。

課題把握 ➔➔ 自力解決 ➔➔ 比較検討 ➔➔ まとめ

【読む】・テキスト・資料・問題文 等　【書く】・文 文章・式・図や絵 等　【話す】【聞く】・ペア ・全体・グループ 等　【書く】・学習の整理・学習感想 等

学力の定着には「伝える」言語活動を！

言語活動を含めた人間の行為と定着の度合いを数字で表したアメリカの研究者がいます。

行為	聞く	見る	聞いて見る	話合う	体験する	教える
定着率	10%	15%	20%	40%	80%	90%

『効果10倍の<教える>技術』(PHP新書)より

子ども同士で教え合う活動を入れること，また，自分の考えや学んだことをアウトプットする言語活動（「説明する」「報告する」「発表する」といった「伝える」言語活動）を授業や単元に組み込むことが大切です。

●Point 2●

2nd element 学びがいのある魅力的な学習課題

児童生徒の「解決したい」「調べたい」「なんとかしたい」という思いを高め，多様な意見や考えが導き出される学習課題を設定することが大切です。意見や考えの多様性が話し合う必要感を生み出します。

●Point 3● 「子どもが動き出す授業」に向けて，めあての文頭や文末を変えてみましょう！

「～について考えよう」「～をまとめよう」「～を読み取ろう」「～しよう」

↓

「なぜ～なのだろう？」「～だろうか？」「どうすれば～」「Ａか？ Ｂか？」

［　　］と［　　］とでは，子どもがわくわくする課題はどちらでしょう？ 子どもが考える「必要感」を持つのはどちらでしょう？ 子どもの疑問や思いを高め，その結果として子どもの内面から出される［　　］のような言葉をめあてにすることで，子どもたちは学ぶ目的・学ぶ必要感を持てるようになります。

●Point 4● 多様な意見や考えを導き出すために「ズレ」を大切にしましょう！

話し合う必要感を生み出すためには，多様性の生まれる学習課題であることが前提となります。その視点の一つに，「ズレ」があります。

○「イメージ」とのズレ　○「感覚」とのズレ　○「生活経験」とのズレ
○「既習内容」とのズレ　○「予想」とのズレ　○「友だち」とのズレ　等

「ズレ」を明確にした上で，それを中心に話し合わせます。相違点を明らかにし，それぞれにその根拠を説明させ，正しいか否かを検討し合うのです。ズレを修正しようと，あるいはそのズレの基を探ろうと，話合いは進んでいきます。このような学習の積み重ねが，子どもに論理的な思考力をはぐくんでいきます。

3rd element 教師によるコーディネート

◎共有させるためのコーディネート

授業で「個人→集団→個人」という過程を踏むのは，多様な思考や表現をできるようにさせるため。だからこそ，他者の考え等を理解させたり，共有させたりする働きかけ（再生・要約・換言活動といった言語活動等）が欠かせません。

「分かりましたか？」「分かりません！」と言える学級にしましょう！

自分の解法を説明し，最後に「分かりましたか？」と全体にたずねる。そして，子どもたちは，元気に「はい！」と答える。小学校でよく見られる風景です。はたしてこの雰囲気の中で，「分かりません」と言えるでしょうか。

授業のポイントとなるべき大切なときに「分かりましたか？」「いいですか？」と問うのはやめましょう。分からない子どもや，よくないと思っている少数意見を持つ子どもが埋没してしまいます。

●Point 5●

◎ 高めるためのコーディネート

授業には「ねらい」があり，扱う教材には迫らせたい「価値」があります。だからこそ，ねらいや教材の価値に迫るような発言が出たときには，それを広げたり，どう思うかを問いかけたりするコーディネートが必要となります。

●Point 6● 思考を働かせる発問とは!?

できるだけ多くの発問を用意し，授業のねらいや教材の持つ価値，児童生徒の実態等に応じて発問を精選していきましょう。

＜思考力を働かせるための発問とは…＞
○ 選択したり判断したりすることを求める発問
○ 二つの関係を把握したり比較したりすることを求める発問
○ 原因と結果を探ったり，分析・要約したり，説明したりすることを求める発問
○ 人物の性格や人柄，心の中の動き，場面の情景などを思い描く発問　等

4th element 親和的な学級集団

伸び伸びと，そして生き生きと自分の考えや意見を表出できる環境，間違っても笑われたり冷やかされたりしない安心した環境が，子どもたちの思考力や表現力をはぐくむ基盤となります。

●Point 7● 子どもの言葉をはぐくむために，言葉を子どもに預けましょう！

子どもが発表した後，教師の言葉に「翻訳」し，全体に伝え直すという行為をしていませんか。これでは子どもの言葉は磨かれません。

子どもの発表が分かりにくいときには…
○ 「えっ!? どういうこと？ もう一度言ってみて」と，再度本人に説明させる。
○ 「○○さんが言おうとしたこと分かった？」と，他の子どもたちに説明させる。

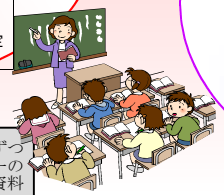
考えを自分の言葉でなんとか伝えようとする子どもや，友だちの発言を，その思いに寄り添いながら言い換えられるような子どもを育てるためにも，言葉を子どもに預ける勇気を持ちましょう。

●Point 8● 授業の中で，「ルール」と「リレーション」をはぐくみましょう！

みんなが気持ちよく生活するための決まり（ルール）が共有され，温かい人間関係（リレーション）が形成された良好な学級集団，学び合う集団づくりを，授業を通して行いましょう。

① 授業の中で，「ルール」を育てる。【一斉授業でみんなが気持ちよく学ぶための学習規律】
○ 時間の遵守　○ 発言の仕方　○ 聞く態度　○ 学習準備　等

② 授業の中で，集団に「リレーション」を育てる。
○ お互いにかかわり合いながら，協力して活動する場面の設定
○ 活動や発言のよさをお互いに認め合ったり称賛し合ったりする機会の設定
○ 学習内容を教え合ったり相談し合ったりする活動の設定



本ページの詳細については，『研究紀要Vol.40』に掲載されています。各校に１冊ずつ配付されていますが，当教育センターの Web ページからの閲覧も可能です。センターの Web には，新学習指導要領における各教科領域での「言語活動の充実」についての資料や，昨年度の研究内容なども掲載されておりますので，ぜひご覧ください。

～ 実践に役立つ教育資料のご紹介～

◆活用力に関連する資料

○ 活用力の向上を目指した算数科学習指導に関する実証的研究

平成21年度研究紀要　和歌山県教育センター学びの丘（2010年3月）

・・・「問題把握」「自力解決」「学び合い」「振り返り」の４つの指導過程を設定して、子どもたちの活用力を向上させるための算数科の授業づくりについて紹介しています。

◆言語活動の充実に関連する資料

○ 言語活動の充実を図る全体計画と授業の工夫　　独立行政法人教員研修センター（2010年2月）

・・・言語活動の充実を図るための学習指導について、各教科及び総合的な学習の時間の学習指導案の具体例等を紹介しています。

◆理数教育に関連する資料

○ 理数教育における思考力・判断力・表現力の育成に向けた学習指導に関する研究

平成21年度長期研究員研究報告第29集　神奈川県立総合教育センター（2010年3月）

・・・中学校と高等学校の数学・理科を研究対象として、思考力・判断力・表現力を育成するための学習指導についての実践・分析を紹介しています。

◆教員研修に関連する資料

○ 授業研究の活性化を図るための研修方法の工夫・改善
ー研修方法の提案・検証・評価を通してー（３年次）

研究紀要第41集2分冊の1　秋田県総合教育センター（2010年3月）

・・・校内授業研究会において、研修方法を工夫・改善することにより、授業研究が活性化した事例や「授業改善実践シート」等のツールを紹介しています。

「教育資料」「教育図書」の検索用データベース（Excelファイル形式）については、当教育センターWebページからダウンロードできます。なお、貸出しは５冊まで２週間貸出可能です。
教育センターWebページ内「授業づくり参考資料」→「教育図書検索・貸出」または、次のアドレスからアクセスしてください（http://www.cms-center.gr.fks.ed.jp/index.php?page_id=1184&_layoutmode=on）。
※　詳しくは調査研究チームまでお問い合わせください。TEL 024-553-3141

テレビ会議システムを利用してみませんか？
～「FKSテレビ会議ステム」のご案内～

テレビ会議システムで できること。

テレビ会議システムを使った事後研究会

テレビ会議システムは、インターネット接続回線を利用した映像と音声による対話型の通信システムです。１対１の接続はもちろん、複数の地点を接続して会議を行うこともできます。

【事前･事後研究会で活用】

メールやFAXで事前に送付しておいた学習指導案や実施した研究授業について、放課後等の時間を使って教育事務所や教育センターの指導主事に協議に参加してもらうことができます。

【研究授業のライブ配信で活用】

研究授業を行う教室にカメラを設置し、授業の様子を教育事務所や教育センターの指導主事、参観を希望する各学校等へ配信することができます。

【交流授業や学校行事で活用】

複数の学校を接続して学校間の子どもと教師が交流しながら授業や学校行事を進めることができます。子ども間の多様な考えの交流や相手意識を持った表現活動の充実などの効果が期待できます。

※　利用に際しての経費は一切かかりません。また、面倒な報告書等の提出の必要もありません。
詳しくは、当教育センターWebページ内「カリキュラムセンター案内」→「テレビ会議システム」をご覧ください。
【電話・FAXでのお問い合わせ先】TEL 024-553-3141　FAX 024-554-1588